



下商物語

わが母校『下商へ』

寄稿 山田好章氏

下商の校訓「堅忍持久」。辛いことを耐え忍び、我慢強く持ちこたえる。振り返れば、私が在校した昭和二〇年代の終わりは、今のような物が満ち足りた時代ではなく、多くの人が辛抱し我慢しながら、戦後の社会変化の中を生きていました。そこにあつたのは、社会にも家庭にも、そして学校にも人と人のつながりが確かで温かく感じられたことです。母校「下商」には、まさしくそうした心根の教えがありました。

こ、ちよび髭をはやし、校舎を見回せる中央の広場にすつと立って生徒たちを見守っておられました。新入生は入学してまず、上田校長先生から下商史を教えられました。赤間閣商業講習所として産声をあげ、王江・名陵へと学舎を移し、今の千畳ヶ原に至るまでの歩みを上田校長先生がとうとうと話されるのです。そこには、単に校史を追いかける知識ではなく、下商の誇りを持つという教えがありました。

卒業間近の頃になると、上田校長先生は処世術を話してくれました。酒の飲み方も言われ「無礼講と言われようと決して酔って酔いつぶれてはならぬ、酒は両手です

ぎなさい」といった内容です。今の学校なら大問題となりそうですが、教育は社会生活に通じてこそのものであります。私はあつて良いし、それでこそ実践教育の場「下商」だと思えます。

在校時、七〇周年の式典がグラウンドで開催され、二年生と三年生総動員で準備と後片付けをしたものです。それから、市内に住む生徒は原則徒歩通学でした。私の通学路に陸軍練兵場跡地の原野一帯（今の向洋中学校グラウンド付近）がありました。ここは、雨が降ると赤土で足をとられ、冬は寒風が吹き抜ける場所で、震えながら通つたこともある一方、他校の女子生徒とすれ違つたりするのを仲間と楽しみにして歩いた場所です。私は卒業後、陸上部の縁で長く母校と関わってきました。そうした中で当時と今を見聞して、お願ひしたいのが運動会の復活です。私の在校時は、市内・彦島・山陽・山陰の地区分け対抗で、父母や親族、卒業生、近所の住民の

方々が観衆となり、騎馬戦や棒倒しに生徒は熱中し、大いに盛り上がったものです。そこにあつたのは、勝敗を競うことで体力と知力を養うのはもちろん、ひとり一人が異なる才能や良さを発揮し、自己研鑽する精神です。今現在、市内高校で我が母校だけが運動会がないのは寂しい限りです。

下商らしさ、それは先輩、後輩をわきまえた上で、人として互いに認め合う。そうした心身を磨く場が我が母校です。私も社会に出るから、何度となく先輩のお世話になりました。校歌を結ぶ「世の荒波に漕ぎ出でむ」。まさしくこの心意気で、在校生の皆さん、先生方に勇躍してほしいと願っています。

執筆者紹介

山田好章

昭和三〇年本校卒

前下関唐戸魚市場社長

本校同窓会常任理事

本校陸上競技部コーチ